

戦争は「絶対悪」だ。どんな理由があれ、殺人行為に他ならない。

では、戦火のない世界を築くための方策はあるのか。二月に始まったロシアによるウクライナ侵攻を巡って、私の中で答えが見いだせない日々が続いている。

ロシアの侵攻は明らかな国際法違反だ。戦禍をこれほどまでに深刻化させたプーチン大統領の非は言うまでもない。例えウクライナからどんな挑発があつたとしても、侵攻が間違いであることは明白だ。

だが、私だけでなく、日本政府も国際社会もそれを止める最善の方法を見つけられず、一般市民にも悲劇は拡大し、双方のプロパガンダ合戦は激しさを増している。

侵攻を受けたウクライナは、ゼレンスキー大統領を中心に徹底抗戦を選択した。日本を含めた国際社会の多くの国々はウクライナを支援し、ロシアへの経済制裁を強めている。

ただ、そうした動きが強まるにつれ、ロシアの攻撃は激しさを増し、多くの人たちの命が奪われていった。国際社会が結束してウクライナを支援すればするほど、多くの人が死に、核戦争や第三次世界大戦の危険性が増す構図だ。逆に長引く侵攻はウクライナの人々に憎しみを植え付け、将来に

## 答えが見つからない

わたつて紛争が長引く原因になるだろう。

一方で、ウクライナや国際社会はロシアにひれ伏すべきだったのか。それは心情的にも難しい上、戦争が絶対悪であるという事実にも背を向け、民主主義の価値を軽んじることにもつながりかねない。間違いを犯した国をのさばらせておけば、国際秩序を維持することもできなくなる。

その堂々巡りを続けているうちに、時間ばかりが過ぎていく。

悩みが深まるのは抵抗、降伏どちらを選択しても、その先が「戦争のない世界」への道につながるのか見えないからだ。第二次大戦後の国際社会は戦争を回避する外交的な知恵を蓄えてきたと信じていたが、それが今回、たった一人の独裁者の暴走を前に無力さをさらしてしまった。

戦争のない世界をいつか見てみたい。

そう思いながら生きてきた。私の祖父は昨年、百歳近くまで生きて亡くなった。彼は戦時中、乗っていた軍艦を米軍に沈められ、荒れる海に投げ出され浮いた板につかまって九死に一生を得た。その祖父は生前「戦争だけは絶対にダメだ」と繰り返していた。思えば、国際秩序を無視した侵攻など、ロシアの状況は戦前の日本によく似ている。そして、戦争のない世界は遠くにかすんで

しまった。

さらに日本国内ではロシアの暴走を目の当たりにし、「次は北海道が危ない」などと口にする人も現れ始めた。独裁者の侵略にさらされながら抵抗を続けるウクライナの姿に感化され、戦争放棄を定めた憲法九条の改正や、自衛隊の増強を求める声も強まっている。

プーチン氏と親密だったはずの安倍晋三元首相は、米国の核を日本に配備し共同運用する「核共有」の検討にも言及した。その相手に北方領土交渉で事実上の二島返還にかじを切り、無駄に時間を費やしたのは誰だったか。ウクライナに近い国でも軍事同盟や軍備増強を検討する動きが伝えられている。

だが、それらの先に待つのは軍拡競争による破滅への道だ。そのこの意味を冷静に考えてほしい。

ロックシンガールの故忌野清志郎さんはジョン・レノンの「イマジジン」の訳詞として「国境はない。ただ地球があるだけ。みんながそう思えば、簡単なこと」と歌った。その「簡単なこと」が、世界の英知を集めたはずの二十一世紀の国際社会にもできない。無力感をかみしめる春だ。